

2. 研究の詳細

プロジェクト名	伝統芸能による表現活動を通じた総合的な学びの研究 —狂言を柱とした音楽・舞踊・言語表現力育成カリキュラムの構築—		
プロジェクト期間	平成 27 年度		
申請代表者 (所属講座等)	山本 百合子 (音楽教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	
<p>①研究の目的</p> <p>日本の学校教育で近年とりわけ重視されるようになった伝統芸能の多くは、パフォーマンス面では音声表現(音楽)と身体表現(舞踊)と言語表現(台詞)の総合によって成立しており、伝統芸能の世界においては独自の方法によってそれらの総合的な伝承が長年行われてきている。しかし学校教育の現場では、これらの三つの要素が学校特有の音楽/体育/国語という教科に分断され、学校教員のスキルもそれぞれの教科内でのアプローチ法(学ばせ方)にとどまり、総合体としての伝統芸能の学びは実現できていない状況にある。</p> <p>伝統芸能自体の本来の姿を捉え、そこから生まれる芸術性そして人間生活に生かされるべき技やエネルギーを体得するには、学校教育においても、伝統芸能を総合的に学び、現代の人間社会に生きるための力として活かしてゆくカリキュラムが必要とされている。</p> <p>そこで本プロジェクトでは、伝統芸能の代表例で早くから国語科教材としても採用されてきた狂言を取り上げ、狂言の多角的な学びによって、音声/身体/言語の表現力を同時に高めていくようなカリキュラムの構築を目指して、小学校における狂言教材の教科横断型実践教材の企画と試み、またすでに実践と取材を行っている幼稚園教育での実践の継続とカリキュラム構築の継続を合わせ、初等教育における表現力の総合的な学びの方法を研究することを目的とする。</p> <p>②研究の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校教育における狂言教材の位置付けと伝統芸能教材全般の教育上の目標・目的の調査および確認(教科と内容の両面から) ・小学校現場における狂言教材の実践状況と、教員の意識調査 ・狂言の伝統的な伝承形態と、学校教育の教育形態の、両者の調査および比較検討 ・小学校における狂言教材の総合実践的カリキュラムの試案作成と授業実践 ・カリキュラム試案作成と授業実践を通じた実践効果と教育成果および課題の検討 ・幼児の表現遊びの実践との比較考察 ・本プロジェクトの研究目標へのまとめ(論文発表) <p>③研究の方法・進め方/④実施体制</p> <p>小学校の教材に従前より今日に至るまで採用されている狂言教材自体の内容や目標、また昨今の伝統芸能教材全般の教材としての意義等については、研究代表者による継続的な文献資料調査によって行った。</p> <p>また小学校現場における教育実践状況の調査や現場教員の意識調査そして課題をめぐる協議、そして学校現場での実践の試行は、本学附属福岡小学校・福岡市立平尾小学校・西高宮小学校・春住小学校・宗像市立赤間小学校・福津市立福間南小学校、計6校の協力と、本学非常勤講師でもある和泉流狂言師の野村万禄師および宮永優子師の協力を得て、調査と実践活動を実現することができた。</p> <p>⑤平成27年度実施による研究成果</p> <p>本年度の本プロジェクトによる研究成果は、まず研究の導入(前提)として、研究対象教材(=狂言教材)自体が教材としていかに扱われてきたかについて、長年の変遷も含めて改めて確認できたこと、そしてそれを学校教育の現場がどのように授業実践しているのか、授業実践上の課題は何かについて、実践事例の取材をもとに新たな授業計画の構築と実践を行い、その結果をふまえた小学校教員と狂言専門家と研究者で協議を通じて、現状の課題が明らかになったこと、さらには前年度手がけた幼児教育における狂言の活用との照合によって、より幅広く初等教育における伝統芸能の総合的な教育カリキュラムの可能性について考察することができたこと、が挙げられる。(以上の研究成果の詳細は、論文に執筆予定。)</p>			

⑥今後の予想される成果(学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果)／⑦研究の今後の展望

狂言をはじめ能や歌舞伎などの日本の伝統芸能は、学校教育においては、音楽科教材としてその音楽面のみが切り取られたり、国語科教材としてその戯曲としての文学的内容面だけが切り取られたり、社会科における文化史の一面としての歴史的背景だけが切り取られたりして扱われがちで、かつ一方で、身体活動や演劇表現や視覚造形上の美的価値といった側面は取り残されたりもしている現状があり、総合芸術としての研究の立場からすると、却って本来の魅力に到達しにくくなっているとも言える強い違和感を感じてきた。これは、学校教育における現状の教科の概念や目標の重視にも起因しており、日本の伝統芸能がもつ本来の価値や意味を、本来の総合的な楽しみや味わいのあり方にそって扱うには、教科そのものの考え方を見直す必要がある。折しも本学附属福岡小学校に託された文科省指定研究のテーマである「表現」という新しい教科の枠組みの探求に関連して、本研究は日本の伝統芸能教材の教育カリキュラムの新しいかたちの提案が可能であると同時に、新しい教科の枠組みに対応するための教員の資質能力を補う方策としての、専門家(ここでは伝統芸能従事者)との協力体制や社会連携のシステム作りにも、本研究の対象を拡げていく計画である。

⑧主な学会発表及び論文等

本研究の成果については、本学紀要への論文投稿、および、研究代表者所属の学会における研究発表を予定している。